

江川義忠先生を送る

——語り継ぐべきフィギュア——

清 水 多 吉

哲学科にとっても、文学部、いや本学全体にとっても、今、確実に一つの時代が終ろうとしている。それは、江川義忠先生が本学を去られるということに端的に象徴される。本学にとって、江川先生の時代は、まさに復興、激動、高度成長の時代であった。と、このように書いてくると、私は、ふと、江川先生の時代が昭和史のイメージに重なってくるのを覚える。昭和史が語りえぬ暗流を底に秘めながら、華やかな高度成長で終わったように、江川先生の時代の本学も、多くの語りえぬ思いを重ねながら今日の発展期をむかえている。そしてまた、残酷なことながら、歴史はその成果をのみ享受し、語りえぬ部分を切り捨てて行く。

江川先生の時代のある部分を共に生きて来た私としては、江川先生の時代の暗流、語りえぬ部分の幾つかを平成の時代に語り継いで行きたいと思う。それが、思想を語ってきた者のささやかな仕事であると思うからである。さりとて、わが大学の復興期における苦い思い出のあれこれを語ったとて、どうなるものでもない。要は、平成の時代にも共有されてしかるべき暗流を語り継ぐことであろう。『江川義忠先生古稀記念論文集』で沼義昭教授が語っておられるところだが、わが哲学科は、戦後もごく初期、樺俊雄氏の薫陶を受けた時期があったという。更に遡れば、あの三

木清も非常勤として勤務していた時期があったと聞く。三木清の時代は私は知らない。しかし、樺俊雄氏は本学を離れられた後、別な機会でおつき合いをいただいていたのでよく知っている。氏は、西田・田辺に代表される京都学派に連らなり、この学派が右傾向化した時代に、モダニズムの立場を守り、戦後、この学派の左派を代弁する論客として活躍されることになる。樺氏の後に菅谷正貫氏がおられ、また非常勤としてはあの三枝博音氏もひかえておられた。江川先生は、このような知的雰囲気の中で学生時代から助手時代をおくられたのである。

私が哲学科の講師になった昭和三〇年代後半、江川先生はまだ助教の時代であった。今にして思えば、この頃が江川先生の学問に方向性が見えてくる時期であった。略歴を見ていただければわかる通り、この時期以前の先生の論作に、「ヘーゲル」あるいは「弁証法」という名称を冠した論文が目につく。おそらくこれらの論作は、樺、菅谷、三枝といった知的雰囲気の中でねりあげられた論文であろう。そしてまた、「ヘーゲル」あるいは「弁証法」というテーマは、あの時代、即ち、敗戦直後の混乱の時期、モダニズムだけでは満足できない当時の哲学青年たちの熱い期待をこめた論題であった。江川先生ご自身の述懐によると、この論題にとり組むにいたった動機は、特に、菅谷氏の示唆によるところ大であったそうである。菅谷、江川両先生からは遥かに遅れて戦後体験を経た私の時代は、戦後状況に熱い期待を寄せる時代ではなくなっていた。そこで、菅谷、江川両先生に対して、「弁証法」理解でよく論戦を挑んだことを覚えている。

当然のことながら、「弁証法」理解は時代とともに変る。それは、ヘーゲルのものであれ、誰のものであれ、「弁証法」の内容の多様さによる。あの当時、生意気な私の挑発に誠意をもって答えて下さった江川先生の言葉が今も私の耳底に残っている。人間存在が矛盾に満ちた存在であり、様々な矛盾を通して変化して行くものであること、しかし、最終的に「理性」の力を信ずること等々であった。その言葉の背後に、戦争、敗戦という体験が秘められている

ことを感じとった私は、黙ってしまったことを覚えている。

ところで、江川先生の「弁証法」に対するこのような姿勢は、先生の生涯を貫く姿勢になろうとは、当時、私としては知るよしもなかった。江川先生の初期の論文に美学、芸術論関係の諸論文がある。確かに、先生ご自身に美的感覚があり、雑誌やポスターのデザインまで手がけられたほどであるが、実のところ、これらの諸論文は、先生の思想的「ブレ」の一であったのだ。先生の卒業論文が「ヘーゲル哲学の系譜——青年ヘーゲル論——」であったことは、沼義昭教授も指摘しておられる通りである。ところで、青年ヘーゲルはフランス革命の動乱を目のあたりにして、理性の支配の実態とキリスト教の愛による和解との間を揺れ動いていた。そしてまた、当時の「青年ヘーゲル論」も、ディルタイとルカーチとの間で揺れていた。ディルタイ、ジンメル「生の哲学」的知識を江川先生にもたらしたのは、多分、樺俊雄氏あたりなのではあるまいかと推測する。理性の支配を信じながらも、なおもそれから漏れるものをも評価する。これがマンハイムに依った権文化哲学の中心テーマであったはずだからである。江川先生が、ヘーゲルを論じながら、「ジンメルの芸術哲学」を手がけて行かれたのは、以上のような背景による。つまり、先生の思想的「ブレ」とは、理性の支配を何のコンフリクトもなしに認める図式的思考からみずからを区別するために、必要な「ブレ」でもあったのである。

江川先生が助教授になられた昭和三〇年代なかばは、あの「六〇年安保闘争」を経て、日本が高度成長期へと「離陸」する時期にあっていた。「ヘーゲル」や「弁証法」に熱い期待を寄せていた多くの哲学青年たちは、職業的専門のためでなければ、「ヘーゲル」や「弁証法」を捨てて行った。江川先生の場合はどうであっただろうか。先生の場合も、外見的には「ヘーゲル」や「弁証法」が論作から消えて行く。この頃、代って登場してくるのが、中世最大の哲学者「トマス・アクィナス」である。何故、中世哲学なのかについては、当時の哲学科の人的構成上、手薄な中世

部門を専任スタッフで担当し合おうという発想からではなかったかと思う。しかし、以後、中世哲学は江川先生の人
生を決定してしまう。では、江川先生の初期論作を貫いた「ヘーゲル」や「弁証法」は、どうなって行ったのか。実
は、先生のある思想的「ブレ」まで含めて、このテーマは、先生の中世研究にそのまま生かされて行く。何故である
のか。

トマス・アキナスは、当時、アラビア経由の新知識であったアリストテレス哲学によって、キリスト教神学を体
系づけた神学者であった。だが、それは死後の評価であり、生前は多くの非難の声につつまれていた。それというの
も、彼は、多かれ少なかれ新プラトン主義的哲学によって補強されていた当時の神学に対するアンティの立場に立っ
ていたからである。結局、トマスをめぐる論戦は、「理性の光」に照らしての神学か、「理性の光」とは言いながらも、
「神の恩寵」による信仰かという「ブレ」をめぐる論戦でもあった。江川先生のテーマがこれである。もし、その後、
中世後期からルネッサンス、宗教改革期にかけて、「理性の光」派が勝利を占めて行くというのなら世話はない。こ
れではまるで浅薄な近代主義者になってしまうし、史実にも反している。史実は、「神の恩寵」派が近代キリスト教
を準備して行ったことを教えてくれている。「理性の光」派は敗北したのか。これも、そんなことはない。やがて、
この対立は、例えば、ルッター対エラスムスという近代初頭の論戦となって展開されるだろう。江川先生の研究は、
トマスに焦点をあて、やがて壮大な思想のドラマが展開されることを予想させる基礎的研究であったのだ。

現代のキリスト者なら、トマスの研究者は多くいる。だが、それらの人々の研究は、結局のところ、護教的立場か
らの研究であるにすぎない。現代哲学を専攻している私から言わせれば、現代のトミスト（トマス主義者のこと）た
ちが、どれだけ論作を重ねようとも現代の諸問題に通底する何ものも感じとれない。江川先生の論作は、あたり前の
ことだが、護教的立場などとは無縁である。以上、紹介してきたごとく、江川先生のトマス研究の根底には、敗戦期

から助教時代までつちかわれた思いが、暗流として流れている。「理性」の力を信ずること、そしてまた「信ずること」という表現に示されるように、それから漏れた「ブレ」をも評価すること。

ものみな均質の時代に、「理性」の力とそれからの「ブレ」などというテーマは、時代にそぐわないだろうか。私はそうは思わない。江川先生は確実に一つの時代を生きられた。研究者としても大学人としても。そしてまた、江川先生の心底に流れる暗流としての「ブレ」を語ることなくして、思想を語ることも何の意味もない。均質の時代であればこそ、先生に代表される姿勢は語り継いで行くに価する精神的フィギュアであると信じて疑わない。

著 書 (共著・編著を含む)

- 昭和三二年九月 『哲学序説』(菅谷正貫氏と共著) 立正大学哲学研究室
昭和三九年四月 『哲学の諸問題』(菅谷正貫氏と共著) 立正大学哲学会
昭和四〇年三月 『トマス・アクィナスの人間観』(モノグラフィ) 立正大学哲学会
昭和四〇年十一月 『西洋倫理思想の展開』(共同執筆) 日本評論社
昭和四三年二月 『社会と倫理辞典』(共同執筆) 日本評論社
昭和四四年三月 『哲学の諸問題』(増補改訂、菅谷正貫氏、白土みどり氏と共著) 東銀座印刷出版
昭和四六年三月 『論理的思惟と哲学的人間観』(菅谷正貫ほか二氏と共著) 東銀座印刷出版
昭和五一年四月 『哲学の歴史と諸問題』(共著) 東銀座印刷出版
昭和五九年十一月 『哲学と宗教』(共著) 理想社
昭和六〇年四月 『トマス・アクィナス哲学研究』 東銀座印刷出版
平成元年四月 『哲学』(編著) 東銀座印刷出版

論文

- 昭和二八年二月 「ジンメルにおける相対主義と形而上学」 立正大学哲学論叢 第一号
- 昭和二八年三月 「ヘーゲルにおける有和の概念」 立正大学哲学論叢 第二号
- 昭和二八年九月 「俗流弁証法批判」 ソシエテ（国際社会科学協会）第一号
- 昭和二八年一二月 「ジンメルの芸術哲学」 立正大学哲学論叢 第三号
- 昭和二九年六月 「近代芸術の系譜」 立正大学文学部論叢 第二号
- 昭和三〇年七月 「美術教育試論」 立正大学哲学論叢 第四号
- 昭和三三年六月 「トマス・アキィナスにおける自然法と形而上学」 立正大学文学部論叢 第九号
- 昭和三三年九月 「近代美の反省」 山梨学院短大法経研究 第二号
- 昭和三六年一月 「宗教と倫理の関係」 菩提樹 第三号
- 昭和三六年一二月 「倫理にかかわる宗教の積極的な意義」 立正大学大崎学報 一一三・四号
- 昭和三九年一月 「E・トレルチの宗教観」 立正大学文学部論叢 第一八号
- 昭和四一年一月 「トマス・アキィナスの主知主義」 立正大学文学部論叢 第二三三号
- 昭和四二年一月 「トマス・アキィナスの人間観(二)」 立正大学人文科学研究年報 第四号
- 昭和四四年一二月 「中世哲学における魂不死の論証について」 立正大学人文科学研究年報 第七号
- 昭和四六年一〇月 「ヨーロッパの古都——大聖堂に中世を偲ぶ」 立正大学人文科学研究年報 第九号
- 昭和五九年三月 「トマス・アキィナスの信仰論」 立正大学文学部研究紀要 第一号
- 昭和六二年二月 「トマス・アキィナスにおける法の体系」 立正大学大学院紀要 第三号
- 平成元年三月 「トマス・アキィナスの人間観(三)——人間における徳の諸相——」 立正大学文学部論叢 第八九号

その他

- 昭和三五年三月 「立正大学拝見——哲学研究室便り——」 日蓮宗新聞
- 昭和三五年六月 「抗議デモに参加して」 日蓮宗新聞
- 昭和三五年六月 「政治関心は学生の義務」 立正大学新聞
- 昭和三七年六月 「仏教の社会学的解明——久保田正文著『仏教社会学』——」 立正大学新聞
- 昭和三八年一月 「思想史の試みも——国際社会科学協会編『現代科学の思想と方法』——」 図書新聞
- 昭和四〇年三月 「巻頭言——ロゴス発刊に思う」 ロゴス
- 昭和四〇年六月 「菅谷正貫著『哲学と宗教』」 法華
- 昭和四一年一二月 「汝自身を知れ」 谷高新聞
- 昭和四八年一〇月 特別寄稿「母校」 谷村高等学校総会
- 昭和五一年三月 文学部五〇年の歩み「刊行の辞」 立正大学文学部論叢 第五五号別冊
- 昭和五五年三月 「ひとつの思い出——学長時代の古屋喜代子先生——」 古屋喜代子学長追悼集
- 昭和五六年三月 「卒業論文と学生」 立正大学父兄会報
- 昭和五七年五月 「諸学のあり方は主客のバランスに」 大学受験（教育新聞社）
- 昭和五八年三月 「父兄懇談会仙台会場参加記」 立正大学父兄会報
- 昭和五八年四月 「石橋湛山学長と立正大学」 立正大学橋だより
- 昭和五八年一月 「菅谷正貫先生の思い出」 立正大学橋だより
- 昭和五八年一二月 「菅谷正貫先生を悼む」 立正大学文学部論叢 第七七号
- 昭和六〇年三月 「藤田美実先生を送る」 立正大学文学部論叢 第八一号
- 昭和六二年三月 「現代の菩薩道を説く」 フォーラム（立正大学報）
- 昭和六二年七月 「学院長古屋真一先生の半寿を祝して」 創立者古屋真一学院長半寿記念文集